

# 大学におけるドイツ語教育の問題

——いわゆる「コミュニケーション」授業をめぐって——

村上 祐子

## 1. 国際化の潮流と大学における語学教育

### a. 国際通用語としての英語

第二次世界大戦が終わって後、英語（ないし米語）は国際的な会議や貿易などの場で用いられる言語として、ますますその通用度を増して、かつてのフランス語の地位をはるかに越えてしまった。この情勢に対応してほとんどの大学の教養課程では、英語を必修の第一外国語とし、それ以外の言語を第二、第三外国語として、学生に選択学習させていた。すなわち学生が将来どのような分野に進むにしろ、英語を用いる能力が絶対に欠かせないと考えられたからである。

この判断はその後の国際情勢の進展に照らしてみても正しかったといえる。たとえば、世界全体がいわゆる情報化の方向に進み、その情報伝達手段の代表的なものとなったインターネットの開発が英語圏、特にアメリカを中心にして展開していったので、インターネット関連の基礎言語が英語を主軸に構築された。つまりインターネットを効率的に使用するためにはどうしても英語の力が必要とされ、社会の情報化が進めばすすむほど世界共通語としての英語の重要度が高まるという事情のあることは、誰の目にも明らかであろう。

ただし大学における英語教育が、現在このような世界情勢に対応して構築され実行されているかどうか、またもしそうであるとしても、その方向の英語教育が本当に望ましいかどうかは、必ずしも自明ではなく、関係者の今後の研究に

待つところが多いと思われる。しかもこの問題は小学校から英語教育を始めようとする動きとも関連するので、きわめて広範で複雑な議論を必要とするであろう。ただ少なくとも、英語教育が他の外国語教育とは全く異なる要素を多く含んでいることだけは明らかであって、その意味で、大学における「外国語教育」一般の問題とは、区別して論じられなければならない。

### b. 英語以外の外国語教育の問題

大学で教えられている外国語にはドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、中国語、韓国語などの現代語と、ギリシア語、ラテン語をはじめとする古典語がある。これらを選択する学生は、ある者はフランス文化の専門的研究者になるためにフランス語を、またある者は中南米との貿易にたずさわるためにスペイン語をとるように、それぞれ自分の将来像との関連で授業の選択をすると思われる。これらのうち、ギリシア語やラテン語、サンスクリットやアラビア語、古代・中世のヨーロッパ各国語など、最初からきわめて専門的学術的な目的で学ばれるものは別として、現代外国語を扱う授業においては、最近そのすべてに共通する教育理念上の変化が生じている。それは、いわゆる「国際化時代にふさわしい外国語教育を」という有形無形の要請によるものであって、この要請に対してどのように対応すべきかに、全ての語学教師が多かれ少なかれ苦慮しているといってもよいのではなからうか。

ドイツ語にしてもフランス語にしても、近代ヨーロッパ語が大学で教えられているのは、明治時代に成立した旧制度の高等学校のカリキュラムを現在の大学が引き継いだことから来ている。当時の日本の指導的地位に立つ人々は、自然科学、人文科学、工業技術などのいずれの部門を問わず、日本の学術・文化の水準を高めるために、多くの学術書をヨーロッパ語で読み解き、日本語に翻訳して、書かれてある内容を日本の文化の発展のために使う能力を持たねばならなかった。すなわちそこに問われたのは「相互理解」ではなく、一方的な理解と受容とであった。したがって、語学とは「解説の学」であればよく、語学の授業はまず何よりも読解力をつける授業でなければならなかったのである。

この伝統は旧制高等学校の語学教師が、第二次世界大戦後に誕生した新制大学の語学教師に転身したとき、そのまま引き継がれた。そしてこの「読解の学としての語学」伝統が、多少の疑問を当事者の胸に抱かせながらも、戦後の経済成長の時期にも、ほとんど変化なしに生き続けたのであった。

日本が経済成長に成功し、世界で経済・文化上の役割を担うようになったとき、日本の指導者層が「受容と応用」の能力にすぐれ、「交流と貢献」の能力に乏しいという批判が、色々な場で発せられるようになった。そしてその原因の一つとして「大学における語学」のありかたが指摘され、当事者に対してその改革が陰に陽に求められているのである。しかしこの問題を誰よりも早くに気づき、切実に改革に取り組んできたのは、実はその当事者である語学教師たちであったと思われる。その証拠に、「会話の楽しめる外国語」というような題名の教科書が、経済成長期の半ばごろからしきりに出版されるようになり、また日常会話を中心とする授業も、各大学に出現した。

しかし最近、ここに一つの錯覚があることがだんだん明らかになってきた。それは、実用会話を目指した外国語が必ずしも当初思ったほど

の支持を学生から得られないことであって、理由は、その程度の練習では「実用」に役立たないということが分かってきたからである。つまり英語が国際語としての通用度を高めれば、それ以外の言語での会話能力をつける必要は薄れ、意思疎通なら英語だけでその目的が果たせるからである。英語を意思疎通の手段とする「国際化」が進めば、英語以外の外国語教育で「会話能力」の育成に重点を置く必然は薄れてゆく一方である。

だが、本当にそれでよいのか。もう多言語を話し書く能力は必要がなくなり、英語が達者であればそれですむのか。この単純な英語重視の風潮を、真の「国際化」と呼べるのか。

これは外国語教育全般を視野に納めて考察すべき問題であろうが、しかしそれはさしあたり筆者の能力をはるかに越える仕事なので、本論においてはまず焦点を「ドイツ語教育」の上にしぼり、そこに見えてくるものから、ささやかながら筆者の見解をまとめてみたいと思う。

## 2. ドイツ語教育の意義

### a. 一般的な語学教育において

大学の従来的一般教育において、英語に次いで受講者の多いのはドイツ語とフランス語であった。その理由は旧制高等学校においてドイツ語とフランス語が非常に重要視されて来たことにあり、この伝統がそのまま新制大学に引き継がれたことによる。ここではフランス語の問題は別として、ドイツ語だけに焦点を当てるが、ドイツは第二次世界大戦の敗戦によって国際的影響力を一時的に失ったにもかかわらず、それによっても日本の大学のドイツ語教師の数が急に減るということとはなかった。いわゆる教養課程語学教育におけるドイツ語重視はその後も長く続き、しかも授業におけるテキスト講読重視の傾向も続いた。

その後だんだんと語学教育における英仏独語中心主義は是正され、さまざまな現代外国語が

科目に取り入れられたが、それは「国際化」現象と歩調を合わせるものでもあったので、時代の要請する実用性の面を色濃く反映するものだった。ドイツ語教育もこの風潮に影響を受けざるを得なかった。

しかしながら、「実用性」の内容は時代と共に変化する。書物よりも映像による文化受容の時代となり、ツーリズムの繁栄に煽られて、ドイツ語教師たちも新しい形の授業を開拓しなければならなくなったが、しかしそこには今度は、「国際化」イコール英(米)語の世界支配という壁が立ちふさがっていた。旅行や国際会議などは英語で片がつくとなれば、読書に重点を置かないドイツ語に、どのような面で新しい教育の可能性が期待されるのだろうか。

近年の状況を見ると、大学のカリキュラム改革では従来の第一外国語、第二外国語の区分を廃し、一ヶ国語のみを必修とする改変が行われている。結果的には英語を重視し、それ以外の外国語は軽視ないしは無用視する傾向にあるようである。しかしながら大学における科目は、単なる経済性、実理性ないし功利性によって重要度をきめられるものではない。むしろ英語がイギリス(ないしはアメリカ)という国の歴史や文化とは直接何の関係も無い場でも、単に外国人どうしの間での意思疎通のために用いられる世界通用語となり、純粋な意味での「外国語」としての性質を失っている現在こそ、外国語の学習の本来の目的は、英語以外の外国語によらなければ達成できないと言うべき状況にある。そしてドイツ語の教育もまた、その意味で大きな役割を持つのである。

ドイツに旅行したり、世界のどこかでドイツ人と出会ったりしたおりに、私たちがドイツ人たちと英語で意思の疎通をすることには何の困難もない。これを別の視点からみれば、日本にいる外国人の誰かと英語で話しているかぎり、その人がドイツ人であろうとフランス人であろうと、トルコ人であろうとエジプト人であろうと、本質的には大きな相違はない。英語が上手

か下手かという違いはあっても、要するに意思が通じ合えばそれで用が足りるのである。しかし相手がドイツ人であり、もしこちらにもドイツ語を使用する能力があって、ドイツ語で話し合うことができれば、相手が背後にどのような文化や生活形態を背負った人間であるかが、言語感覚をとおして感じ取られ、相互理解が血の通った人間的なものになるのである。そこには英語を通してする相互理解とは、本質的に異なるものがある。なぜならば各国の言語には、その国に住む人間たちの生活感覚が染み付いているからであり、単なる意味の伝達以上のものが言語を通して伝わってくるからである。

ドイツ語教育は、英語が国際通用語に変身してゆけばゆくほど、国際的理解の感覚を学生に身につけさせるために、他の外国語と共に今後ますます必要となるはずであり、また必要とされなければならない。

#### b. ドイツ語専攻の教育において

大学で専攻する専門分野として、例えばドイツ文学科、ドイツの文化と社会などという名称の学科があり、そこでは主にドイツ語とドイツ文化を学ぶことをカリキュラムの軸に据えている。そこで学ぶ学生のうちの多くは、卒業してからあとは社会に出て、ドイツ語を使う能力が評価される職業につくことを希望していると思われる。勿論若干の学生はさらに、ドイツ語学、ドイツ文学、ドイツ史、ドイツ経済、ドイツ法などの専門研究に進み、将来は研究者や教育者になってゆく。それでは現在、このような専門家養成教育の場で行われているドイツ語教育は、どのような問題に直面しているのだろうか。

この分野も、大きく見て、一般の語学教育におけるドイツ語教育と同じ状況にあると言ってよい。つまり国際化がもたらした英語を共通言語として進んでいるので、実社会でドイツ人と意思疎通をするだけならば、必ずしもドイツ語を学ぶ必要はないと考える風潮が、ここにも侵入

してきているのである。そして多くの教師は、かえって「生きた言語を通しての国際化」の努力をあきらめ、英語化されていないドイツ語の文献を解説する能力の開発だけに専念するという、いくなれば一種の退行現象に身を任せている。勿論そうなればドイツ語を専門とする学生の数も減少し、いずれ学科そのものが「採算に合わない」として、経営者により抹殺されるであろう。

先に一般学生を相手にする語学教育のところで、ドイツ人と英語で話している限り、その人間の背後にある文化やその民族に特有の考え方や感じ方が伝わらないということを述べたが、ドイツ人やドイツ民族に固有の文化は、決して国際通用語としての英語を通して体得できるものではない。すなわち大学で教えられるドイツ語は「生きて」いなければならないのである。生きたドイツ語を駆使できる人材が少なくなれば、ドイツに対する理解も対応も、すべて英語（ないし米語）しかできない人材の判断によって左右されることになり、ドイツ人の行う政治も経済も学術も、本当の意味で評価すらできなくなってしまう。これこそ国際的な相互理解の幅をいちじるしく狭くし、人類文化の多様性を知らない無教養な日本人を作り出す道ではないだろうか。

それでは新しい時代にふさわしい「生きた」ドイツ語とはどのようなものでなければならぬか。それは相手の人間の背後にある民族的慣習や文化的特質などのすべてを、相手の母国語を通して直接に感じ取り理解することができるように、ドイツ語を身につけることである。一般の語学授業においても、またドイツ研究の専門学科の教育においても、同じドイツ語教育である限りは、この点において少しも異なることはない。相互理解のそのような営みのことを、ドイツ語では *Kommunikation* という。すなわち英語からすでに日本語カタカナ単語になっている「コミュニケーション」なのだが、この言葉を「国際的相互理解のいとなみ」という意味

に用いながら、あるべき「コミュニケーション」教育のありかたを、ドイツ語教育について考察して見たいと思う。

### 3. コミュニケーション能力の開発をめぐる考察

#### a. バイリンガルに育った体験から

筆者がドイツから帰国して、大学でドイツ語を教えるようになってから、もう 10 年が経とうとしている。私は小学校 5 年生の頃からずっとドイツで育ち、中学 1 年に当たる歳に両親が日本に帰った後はドイツ人の家庭で生活して、そのまま（勿論ドイツでは呼び方が違うが）中学・高校・大学と進んで、ドイツで音楽教師として就職した。つまり私にはドイツ語が母国語だといつてよい。しかしその反面、ドイツに渡る前に家庭教師について、小学校 6 年の教科書を一通り学び終えていたし、両親との約束で毎日日本語で日記をつけて日本に送り続けたから、日本語も普通に使える。その上夫が日本人なので、結婚後はドイツにいる頃も家庭ではほとんど日本語を使い、子どもも日本語で育てた。つまり私はバイリンガルなのである。

1992 年に帰国して、さっそく幾つかの大学でドイツ語を教えることになったが、平均的なドイツ人と同様に、私は「ドイツ文法」を意識的に勉強したことがなかったので、まず自分がそれを、「一から」学ばねばならなかった。これは私にとって、かなり新鮮な体験であった。今まで自然に使っていた言葉を分析しながら、語尾変化などもなるほど、そういうことなのかと、謎が解けたような気持ちの良さを感じた。何も知らずに使っていた分離動詞や助動詞活用の使い方、文章の終わりに分離した頭の部分が枠のように置かれてしめくくられるなど、文章を最後まできちんと聞かないと気持ちが悪いと感じるドイツ人の性格が、なんととはっきり文法に反映しているのだらうと、私なりに感心し、改めて何かが分かったような快感を味わったのだっ

た。

言葉には、当然なことには違いないが、その国の人の性格がよく出る。あまり自我の主張を好まない日本では、「わたし」という言葉をできるだけ避け、自分の意志を言わないでコミュニケーションを成立させようとする傾向がある。たとえば、

「ねー、どうする?」「うーん。どうしようか?」

などと、探りを入れながら会話が成立してゆく。これに対してドイツでは、まず自分の意見をはっきりと、しかも、しっかりと言わないと、相手に軽蔑されてしまう。では上のような会話をする場合に、ドイツ人ならばどのように言うであろうか。すなわち彼らは

「私はこうしたいのですが、あなたはどのようにしたいですか?」

というように、まず自分の意見をはっきり言うてから、相手の答えを待つのである。相手も、決してこちらの意見に惑わされたり遠慮したりすることはない。まずはっきり自分の考えをのべる。例えば、

「私はこうしたいのです」

と言っておいて、もし双方の意見が違っていたら、それから二人で話し合う。

このように、相手の国の生活習慣や文化などによって、表現の流れ、呼吸、マナーなどに違いがあり、しかもそこには一種のルールがあるから、それを教えるのが「コミュニケーション授業」の大きな目的だと思う。

私にとってはドイツも日本も母国であり、ともに同じ程度に感覚的に近い位置にあるので、ドイツでは自然にドイツ人のように振る舞い、ドイツ人が話すように話す。日本にいるときには、全くの日本人であって、日本的に考え、

話し、行動することに、すこしも違和感を覚えない。しかし改めて自分の行動や言語表現を観察してみると、こんなことはドイツにいる時は絶対にしないな、言わないな、と思うことがしばしばある。住むところによってこんなに違っていいのかしらと、ふと自分がカメレオンにでもなったように思えてくるほどである。

しかしその反面、日本の社会では当然とされている事象に対して、もしドイツ人がこれを見たらどう感じるかということは、全く自然に分かってしまう。これをつきつめれば、日本語を母国語としている自分にとっては当然なことだと思われる事象が、ドイツ語を母国語としている自分には不都合だと思われる現象があるということである。これがある意味でのバイリンガルの人間の悲劇でもあり、また運命の恩寵でもあるのだが、そのような場合に私は、「自分」はいったいどのように対応し反応したらよいのか、という問いに、改めて立ち向かわねばならなくなる。そしてそのときに初めて、「本当に正しい答え」が何かを考える体験が私に生じるのである。

#### b. バイリンガル教師としての体験から

日本に帰って、大学のドイツ語教育に携わるようになった私は、上に述べたような体験を通して気づいたことを、私の中で意識化し、記憶して体系化するように努力した。そして授業の際にそれらを、具体的な例を引きながら、学生に教えてゆくことを試みた。なぜなら、そこからこそ真の国際間のコミュニケーションが始まるのだと信じたからである。その営みの中でいろいろな発見があったが、それらを煎じ詰めて分かりやすく言えば、次のようなことになろうかと思う。

従来ドイツ語教育では、普通の場合まず初級文法を教える。これは確かにもっとも簡単に即席の読書力をつける方法であるが、この方法で学べば、辞書を引ながら難解なテキストの意味を何とか解読することはできても、ドイツ

語を用いて簡単な意思表示をすることすら困難である。たとえもしそれでドイツ語の文章が作れるようになったとしても、日本的な感覚で文章を作って、普通に日常会話で使われる日本語文とおなじように用いると、思いもかけない誤解が生まれたり、相手に非常な不快感を与えたりすることがある。つまりドイツ語で話したり書いたりしたつもりでも、本当の意味でのコミュニケーションが成立するどころか、かえって逆の効果を生み出していることすらあるのである。これは明らかに誤ったドイツ語教育の結果であると言うほかはないであろう。

それでは、実際に大学ではどのような教科書が用いられているのだろうか。たしかに一昔前とは異なり、親しみやすく楽しく学べるように、さまざまな工夫がなされるようになっており、さまざまな出版社が工夫をこらして、カラフルな、イラスト満載の文法教科書や、読本類を提供している。内容も留学仕立てのもの、スポーツ中心のもの、観光地めぐり、環境問題をテーマにしたもの、大学生の日常生活を題材にしたものなど、著者の先生方がありとあらゆる工夫をこらしておられるのは確かである。もちろん「コミュニケーション」を意識して、全体が会話文になっているものも少なくない。「簡単」「やさしい」「面白い」「若い世代のための」等々のキャッチフレーズを題名に取り入れたものも多い。いかにもこれ一冊を勉強すればドイツ人とコミュニケーションができそうな題名の本ばかりである。

しかし本当にそんなにたやすく、ドイツ人とコミュニケーションがとれるようになるものだろうか。たとえば、初級文法を良く学び、問題集もちゃんと解いた学生が、道で偶然明らかにドイツ人だと思われる人に出会い、その人から英語であれドイツ語であれ、とにかく何か尋ねられたとしよう。とっさにドイツ語で返事が返せるだろうか？ またもう少し進んで、雑談風のおしゃべりができるだろうか？ たとえばたどたどしくても良いから

「もしかして、あなたはドイツ人ですか？」

「私、いま大学で、ドイツ語を少し勉強しているんです。」

「私もそちらの方角に行くところですから、しばらくご一緒しましょうか？」

「観光で日本にいらっしゃったのですか？」

などと自然に対応して、相手との間に心の橋が架け渡せるだろうか。このような会話はドイツにいればごく普通になされるもので、人間と人間の出会いのきっかけであり、ことによると新しい運命の出発点ともなるものである。もし学生にそれができ、相手に通じたら、それは立派に異文化圏の人とのコミュニケーションに成功したことであり、学生にとっては大きな自信ともなるのである。しかし現在の大学のドイツ語教育で育った学生には、この「ごく普通のこと」すら、残念ながら、一般的にはそう簡単にはゆかないのが「普通」であろう。

#### 4. 大学におけるドイツ語「コミュニケーション」授業への提言

##### a. 有効なコミュニケーション授業形成の試み

以上のような体験から、筆者は学生がこのような学習結果しか得られないのはなぜか、その原因がどこにあるのかをいろいろ考え、また、自分の担当した学生たちに、今までうけたコミュニケーションの授業がどのような内容だったのかを尋ねてみた。その結果、要するに「実用的なドイツ語」という触れ込みの授業や「ドイツ語コミュニケーション」などという名の科目はあるけれども、そこでは本当の意味での「コミュニケーション」の勉強がなされてはいないからだと考えざるをえなくなった。

コミュニケーション能力を高めることに重点をおいている教科書があまりにも少なく、しかもそのほとんどが初級文法書と同じ内容のもので、ただ日常会話的な装いで、雰囲気を柔らかかにしたに過ぎない。

日本人の先生はおおむね、前後関係（コンテキスト）を抜きにしてただ並べただけの、無内容な会話の例文を丸暗記させたり、例文にしたがって単語を入れ替えて、動詞の形を変えればできるような練習問題をさせたりしているとのことだった。先生が事前に日本語で録音しておいたテープを、学生たちが同時通訳のようにドイツ語で言い直す、というコミュニケーション授業は好評だったらしいが、これはとっさにドイツ語が口から出てくるようにする練習には有効かも知れないが、自分が相手に伝えたい内容を表現するという意味でのコミュニケーションではない。

ドイツ人の先生には、一切日本語を使わずに、ただひたすら先生の発音と言い回しを真似させて、鸚鵡返しを上手にすることが会話の勉強であると思っている人が多いらしい。そしていきなり、明らかに難しすぎるビデオを見せ、ドイツ語で質問をし、それにドイツ語で答えさせようとして、学生をパニックに陥れることがしばしばあり、先生自身は何が学生にとって無理な要求なのか、全く見当がつかないらしいというのである。いたずらにこのような練習をいくらさせても、そこからはコミュニケーションの能力が育つわけがない。

コミュニケーションの授業とは、「話し方」「話の運び方」「話の内容」などを総合した、話すことそのものに重点を置く授業のことである。また、聞き取りには、普通に話される速度で話された言葉を聞き取ることが大事で、そうでなければまったく役に立たない。教科書にはしばしば、非常に分かりやすくゆっくりと明瞭に発音されたレコードがついているが、そのような話し方は日常の会話とかけ離れているので、そんな「実在しない」話し方に慣れると、いざ実際に本当のドイツ人の前に立ったときには、ほとんど何も聞き取れないであろう。そして、恐らくは焦るか絶望するかして、その先の勉強を続ける気力を失うのが落ちであろう。

先に述べたように、筆者は大学で語学を教え

てもらった経験がなく、日本語もドイツ語も生活の中で自然に覚えたものである。したがって、日本の大学で一般的に行われている教え方では学生にコミュニケーションの力を育成することができないとすれば、自分で全てを独自に考え出すしかない。

そこで、自分がドイツ生活の初期に、いきなり全く理解できない言葉の海の中に放り込まれて、どうして次第に謎解きのように、少しずつ他人の言っていることが分かるようになっていったのかを考えてみた。そして自分がしていたのは、きまった状況のなかできまって使われる表現を発見し、それをそのまま自分のものにする営みだったことに思いついた。すなわち状況に対応する表現のパターンである。勿論初めの頃は意味がよくわからないままに、言ってみるとよく通じるからというだけで使っていたり、そのうちにはまた、ドイツ語のできる日本人に意味を尋ねたりしながら、手探りで進んでいったわけである。しかし次第に多くの状況に遭遇して、その都度それぞれの場の基本的な表現パターンとそのヴァリエーションとを覚えて、自分のレパートリーを増やしているうちに、いつとはなしに無意識に、そしてまったく自然に思ったことが自由に言えるようになっていた。

これは恐らく基本的には、赤ん坊が言葉を覚えてゆく過程と非常によく似たものだったのかも知れない。これまでまったく知らなかったドイツ語の世界に投げ入れられ、ひたすら日常生活の中であうコミュニケーションの場において表現を覚えてゆくという点では、赤ん坊と同じ状況にあったと言えるからである。しかし筆者には、日本語を使ってコミュニケーションをするという体験がすでにあった。すなわち12歳には12歳なりの人生経験があり、12歳なりの思考力と判断力があつたということが、赤ん坊とは違って比較的短時間のうちに、新しい言語を一つ自分の言葉とすることを可能にしたのである。

筆者は自分の経験から、新しい言語の習得法

の原則がここにあると確信している。そしてその確信に基づいて、コミュニケーションの授業をするにあたっては、毎回いろいろな状況（会話のシチュエーション）を設定して、その状況でよく使われる表現を学生に覚えさせることにしている。そしてさらに、その場で守られなければならない表現上のルールをあらかじめしっかり教えるのである。それは状況におうじて取らなければならない行動や、失礼にあたるから決して口にしてはならない言い回しなどであるが、実際にコミュニケーションで成功するのも失敗するのも、こういった生活慣習や言語表現上の心理に鋭敏な感覚があるかどうかにかかっていることを、学生に教える必要があるからである。

また学生自身が状況にあった表現を考え出す練習のためには、事前にテーマを与え、そのテーマで自由にスキット（寸劇）を作らせてこさせて、クラスの全員の前で発表させることも効果がある。その時には、用いられた言葉や表現のもつニュアンスが状況に合っているか、あるいはそうでないかをその場で指摘し、文法的な誤りを直し、適切な表現の例を示す。そして、話題の内容のもってゆき方、会話の流れが不自然でないかなどもチェックする。発表者以外の学生たちには、発表を聞きながらその内容を日本語で書きとるように指示しておく。これは内容の聞き取りの大変よい訓練になり、個々の単語の発音の正確さよりも、ナレーションの技術で聞き手に理解させることの大切さが、実感によって体得される。発音に上手下手があるのはあまり問題にすべきではなく、通じる範囲ならばうるさくは直さないほうがよい。

聞き取りの難しさは最後までなかなか克服できないものである。概して女性よりも男性が聞き取りに困難を感じるようだ。筆者はその対策として、ドイツの日常生活などをテーマ別に収録した、ドイツ人が普通に行動しながら話しているビデオを、しばしば見せることにしている。5分ほどの短くまとめたものだが、それ

を各フレーズが完全に聞き取れるまで、何度も何度も巻きもどして聞かせるのである。聞き取れた学生がいればそれを言わせ、それが難しいときには単語だけでもいくつか聞き取れたら、それを言わせる。こうした作業を積み重ねて、自力で全部最後まで聞き取れた後にテキストを渡して、もう一度目で確認しながら聞いてみると、本当によく理解が浸透する。この練習の回数を重ねるごとに、少しずつ学生はドイツ語の響きに慣れてくる。単なる観光旅行であれ、ドイツに一度でも行ったことのある学生は、聞き取れる速度が断然速い。つまり、聞き取り能力の向上は、どれだけ生きたドイツ語を体験するかに左右されるものであり、その体験の質と量によって力に差が生まれるのである。

こういう授業をしていると、教師の方もさまざまな問題におつかる。たとえば、同じ文章でも時と場所、前後関係などで、意味する内容が変わってくる場合がある。例文暗記の問題点がここに一つあるわけである。また単語を辞書で調べてみても本当のニュアンスの分からないことが多い。学生とのやり取りの中で、そういうことが幾つも明らかになってくるのである。また同じ内容のことを日本語で表現する場合と、ドイツ語で表現する場合とでは、表現形成の発想そのものがまったく異なっていて、日本語をそのままドイツ語に移しても絶対に通じないことがある。

これらの問題を授業を通して学生と共に解決しながら、状況にあった表現パターンを学生に身に付けさせれば、本当に相互理解の行き届いたコミュニケーションをドイツ人と結ぶことのできる技能が、学生に育ってくるであろう。

#### b. コミュニケーション教育の目指すもの

コミュニケーションとは相互理解の営みである。したがって、相手方に伝えるべきことがこちらにあって、初めて成り立つ行為であることを忘れてはならない。これが前提であると共に、また辿り着く先の目標でもあることを、教師も



学生もしっかり確認しておく必要がある。

日本人が外国語でのコミュニケーションを得意としていないといわれるのは、外国語の能力が低いこととはまた別の根拠から来ている。私たち日本人は従来、自分の考えを論理的に構成して人に示すことを、一種の社会的タブーとしてきた結果、自分の考えをまとめて、それを筋道を立てて分りやすく話す訓練を、日本語でもほとんどしていない。むしろその反対に、いろいろなことを断片的に並べ、最終的にそれらの総合として話し手の意図が何となく伝わるといふ話し方や、まず友好的な雰囲気をつくることから始め、それから少しずつ本題に入るといふ話し方が良いとされているらしい。そのために、自分の考えを相手に伝える目的でのコミュニケーションそのものに、ほとんどの学生が慣れていないのである。自国語でコミュニケーションをすることに慣れていなくて、どうして外国語でのコミュニケーションが可能であろうか。この事実を具体的に学生に認識させないと、外国人とコミュニケーションをする必要そのものが感じられず、意欲もまた湧いてこないであろう。

この欠陥を意識的に是正するために、ある状況下で他人とコミュニケーションをする情景を、各自がいつもいつも心に思い描くように指導し、その折の話の持って行き方や論理の構成のやり方などを、日本語でよいから練習しておくこと、非常に役立つ。また外国人とのコミュニケーションに成功するために、相手に日本人の心理を分からせる必要がしばしば生じるが、それを可能にするには、自分の国の文化や伝統や感情生活の特性などについて、常に明確な説明が出来るように、日ごろからしっかりした見識を養っておかなければならない。

教師と学生がこの点の認識を欠いては、真のコミュニケーション教育が成り立たない。またこのことを正しく認識すれば、これまでのコミュニケーション教育において曖昧にされたままになっている幾つかの問題も、おのずから解決すると思われる。そのうちの一つが外人教

師によるコミュニケーション授業が有意義か否かの議論であろう。

外国語教育においていわゆる「ネーティヴ」の先生が果たす役割は大きい。これは疑問のないところで、学生が、学んでいる外国語の生きた発音に親しみ、その言葉を母国語として話す人間に慣れるために、外人教師は貴重な存在である。

しかしコミュニケーションの技法を身につけるための授業の場合には、これまでに繰り返して述べたように、二つの国の生活習慣と文化の性格を同じ程度に自分のものにしていない教師でないと、学生にとって本当に大切なことを教えることができない。いわゆるネーティヴの外国人で、しかも日本語と日本文化を普通の日本人と同じ程度に自分のものにしていない人であれば、それは理想的であろう。そういう人は外国人であっても「バイリンガル」だからである。あるときはドイツ人となり、必要などときには日本人となるだけの能力があることが望まれるのであって、そうであれば、日本人であろうとドイツ人であろうと、同じことだと言い換えてもよい。

筆者はこの観点が外国語教育に責任を持つすべての人々に理解され、受け入れられ、制度として実現してゆくことを期待している。

#### 参考文献

- 小野寺和夫ほか：外国語の学習に関するアンケート集計報告（『言語文化センター紀要』1～7号，東京大学教養学部付属言語文化センター 1980～86）
- 鈴木純一：異文化理解とコミュニケーション理論（『多文化社会における合意形成』北海道大学言語文化部研究報告叢書 35，1999）
- 小堀桂一郎：第二外国語開講の辞（『言語文化センター紀要』第3号，東京大学教養学部付属言語文化センター 1982）
- 田中広幸ほか：大学におけるドイツ語教育（『金沢経済大学論集』33巻2号，1999）
- Heiko Narrog: 初習外国語としてのドイツ語教育

- のカリキュラム (『言語文化部紀要』37, 北海道大学 1999)
- 佐藤拓夫: 説得術試論 (『多様社会と公共伝達』北海道大学言語文化部研究報告叢書 37, 1999)
- Reinold Ophuels-Kashima: なぜ「第 2 外国語」が必要なのか — 外国人教師の視点から (『人間と社会』第 10 号, 東京農工大学 1999)
- 岡本時子: 日本人ドイツ語学習者における聞き取り上の問題点 (『外国語教育論集』21 号, 筑波大学 1999)
- 八田洋子: 世界における英語の位置 (『文学部紀要』14-2 号, 文教大学 2000)
- 西本徹一: 『日本人のための異文化コミュニケーション』金星堂, 2001
- マイル・マッコリー: 日本の大学の英語教育におけるコミュニカティブアプローチの評価 (『名古屋女子大学紀要人文社会編』47 号, 2001)
- Heiko Narrog: 大学には「できるようになる」初習外国語教育は本当にありえないのか — 北大, カリフォルニア大学バークレイ校, 慶応大学の外国語教育体制の比較 (『大学院国際広報メディア研究科言語文化部紀要』43 号, 北海道大学, 2002)
- 佐久間 重: 異文化コミュニケーションの様々な側面 — 言語以外の要素について — (『名古屋文理大学紀要』第 3 号, 2003)